

河北新報

9月8日(水)

河北新報社

仙台市青葉区五橋1-2-28
(郵便番号 980-8660)

発行部数
50万部

宮城県を
中心として
東北6県

独居高齢者

誰にもみとられず、亡くなった後に発見される孤独死。社交性がなかったとか、経済的に困窮していたとか。わたしたちとはもすればその原因を単純化し、本人固有の事情に帰してしまいがちだ。

しかし、独居高齢者の増加は避けられない現実だ。特に地縁、血縁が薄れた都市部では「あすはわが身」の末期である。

孤独死の前段として、長期間の社会的孤立があったことを忘れていただろうか。会社人間的思考から抜け出せず、生活術を磨いてこなかった男性にその傾向が強いという。根は深い。

家族だけに頼らない老後のライフスタイルをそれぞれが模索したい。「地域デビュー」を促し、もう一つの居場所を創出す

る取り組みを官民で進めよう。

65歳以上の高齢者人口に占める一人暮らしの割合は女性が2010年の19.4%から30年に20.9%と微増するのに対し、男性は11.0%から17.8%まで急増する。今年の高齢社会白書はそんな推計値を示した。

はわびしい。

白書は60歳以上の男女を対象にした意識調査を紹介。一人暮らしで「困ったときに頼れる人がいない」としたのは女性の9.3%に対し男性は24.4%。同様に「普段、近所の人との付き合いがほとんどない人」は女性が8.3%だが、男性は21.6%に上った。

NPO法人「人と人をつなぐ

肩ひじ張らず地域デビュー

肩ひじ張らず地域デビュー

「会」は東京都新宿区の都営戸山団地で、孤独死を防ぐ活動に取り組んでいる。本庄有由理事長(72)は「一人暮らしの男性は声を掛けても出てこない。一流企業に勤めていた人ほど、会社の話ばかりで…。プライドが高いんでしょ」と語る。

上野教授は学歴や職歴にこだわらず、パワーゲームに没頭する男社会の文化が老後を生きにくくしていると指摘している。重要なのは「カネ持ちより、人持ち」だとも。互助の網の目に入る勇気と才覚、何より柔軟性が重要ということだ。

配偶者との死別や離別に加え、近年増えている非婚男性がよわいを重ねれば、待っているのは「男やもめ」社会。「男おひとりさま道」(上野千鶴子東大大学院教授著)がベストセラーになったのも、先行きに不安を抱く男性がそれだけ多いことの表れだろう。実際のところ、仕事と家庭以外に足場を持たない男性の老後

同団地は1950年の造成。総戸数は約2300戸で、住民の過半数が65歳以上だ。本庄さ

んは数年前、男性が孤独死したことにショックを受け、住民同士の交流の大切さに気付いた。引きこもる男性をどうやって外に連れ出すか。本庄さんたちはギョーザやそうめんを作って食べる「おやじの会」を始めてみた。すると、男だけの気軽さが受けて顔見知りが増えた。仕事帰りの「赤ちようちん」の雰囲気再現したところがみ

(5)

社説 声

(第三種郵便物認可)

社説